



第四號



官許
琵琶湖新聞

定價三錢五厘

明治六年第四月

西垣文庫
文庫 10
7374
4



緒言

新聞ノ徳タルヤ大ナリ内知見ヲ闢キ外事業ヲ施シ
 不知不識文明ノ域ニ進ミ開化ノ室ニ入り上下言路
 ヲ通ジ勸懲善惡ヲ判ス故ニ
 官許シテ天下ニ公ニスル所以ナリ庶幾ハ四方ノ君
 子上公裁ヨリ下俚言ニ至ルマデ縷々記載シ吾社ニ
 投入シ玉ハンコヲ是今日ノ必務ニシテ開明ノ徳ニ
 報スル所以ナリト爾云

西垣文庫



琵琶湖新聞第四號

皇太后宮

皇后以来 御黛御鍊漿被為廢候事

明治六年三月二日

宮内省

長濱勸業社

其會社儀長濱町未曾有ノ火災ニ罹リ困難ノ拵柄金
 二千圓十箇年無利足ニテ出金致シ材木買入元價ヨ
 リ二割ノ抵價ヲ以テ焼亡ノ者へ賣渡シ候仕法相立
 家作速カニ出来候様盡カイタシ候ニ付追々出金ノ

琵琶湖新聞 第四號

者モ有之勸業ノ名義ニ相叶ヒ奇特ノ事ニ候依之其筋へ相伺候處為御褒美金十圓下賜候事

明治六年三月七日

滋賀縣令松田道之

甲賀郡下村

○

坂川傳四郎

其方儀兼而布告モ有之ニ同郡山村神社ノ前ニ於テ無謂石ヲ以テ輕重ヲ量リ神ノ差凶杯ト唱へ參詣人ヲ誑惑イタシ候科違令律ニ依リ答三十申付候事

明治六年二月

滋賀縣令松田道之

栗太郡高野村

○

嶋田佐太郎

其方儀實母ノ折檻ヲ相用ヒズ遊蕩過酒イタシ候科子孫違教律ニ依リ杖一百申付候事

明治六年二月廿八日

滋賀縣令松田道之

○日新真事誌ニ云ク本月二日宮内省へ出仕ノ官貞ヨリ說話ニ昨日 皇太后宮及 皇后宮黛鉄漿廢サレ候令アリテ宮中女房達ノ混雜一方ナラズ昨夜ハ俄ニ鉄漿ヲ磨キ落スヤラ眉毛ヲ墨ニテ作ルヤラ騷ギタル有様ナルガ今朝ニ至リ女房達ノ様子ヲ見ルニ悉皆皓齒有眉ノ風トナリ其容姿恰モ處女ノ如ク

若ヤギ却テ天資ノ艶色ヲ顯シ宮女ノ風換然トシテ
中葉以前ノ美風ニ復古セリト云フ

史者曰ク嗚呼盛ナル哉此令ヤ我邦剃眉染齒ノ風
行ハレシハ中古漢土南北朝ノ末吳國ト通信往来
ノ際一朝其風習轉移セシモノニテ終ニ朝野ニ延
蔓シ因襲ノ久シキ之ヲ固有ノ國俗トシテ野蠻ノ
陋習ヲ怪マザルニ至ル今日宇内万邦ト交際ノ折
柄文明日新断然廢令ニ至リシハ實ニ照代ノ盛典
ト云ベシ獨リ宮中而已ナラズ全國一般公布アツ
テ此ノ醜俗一變アラシムヲ

○地券下取調檢査トシテ當縣官負立川氏甲賀奥郡
へ巡村ノ砌地券御取調ハ地所煩雜ノ明義ヲ正シフ
セラレ候トニテ庶民ノ困難ニナルベキヲ聊カ需
メラル儀ニハ之レ無クト御主意ノ難有ヲ説諭ア
リケレバ或ル一夫ノ曰ク箇様ニ御説諭下サレテモ
動モスレバ空言ト存ジマス其故ハ先達テ種痘御施
行アルトテ悉ク小兒ヲ召連レ出ツベク仰セニテ皆
々御施行ニ預リシニ跡ニテ右ノ手數料相當ニ差出
スベク御沙汰ニ相成リシ故ニ施行ト思ヒシニ存ノ
外ノ事ナリ夫レ故ニ詐リノ程モ計リ難シト云シ由

立川氏モイカミ論サレケルヤ同座ノ人々一笑ヲ發セリト

評者云旨民ニハ能ク其長タル所ヨリ諭スニアリ施行ノ文字ヲホドコシモラフベキト而已思ヒ居ルハ佛教ノ習弊ヨリ出ルナリ吳音ニセギヤウト讀ミ漢音ニシカウト讀ム今此施行トハ一般ヘ種痘ノ術ヲ布キ行ハル、儀ナレバ不瞭解ヨリ意味ヲ取キガヘシナラン皆々心掛テ學問ヲナシ御趣意ヲ守テ文明ニ進ミ玉ヘ

○香港新聞第二千三百六十九號ニ四民論ヲ記載シ

テ曰民ハ何ヲ以テ分ツテ四トナスヤ昔時先王人材ヲ撰シテ天下ノ事務ヲ掌サドラシム故ニ士タル者ハ最モ知識ヲ有ス工商之レニ次ギ農ハ最モ淳朴ナリ天ノ民ヲ生ズルヤ朴多クシテ智少シ故ニ農ハ多クシテ士ハ最モ少ナク工商又之レニ次グ農多ケレバ則士工商ノ食ヲ給スルニ足ル然ルニ近世農少ナフシテ三民倍殖スルハ何ゾヤ後世華美日ニ増ス故ニ工多シ而シテ其末業ヲ賤シミ惟レ財惟レ競フ故ニ商多シ古昔士タル者ハ實行ヲ舉グ後世浮文ニ流レ遊逸日ニ盛ナレバ士ノ増加スル最モ多シ斯ノ如

ク三民多ケレバ安ゾ農ノ多キヲ得ンヤ農少ナケレ
バ穀減ズ穀少ナケレバ民日ニ貧シク國日ニ衰フ然
ル片ハ之ヲ治ムル如何曰ク士ヲ減ズルノミ凡ソ士
タル者必ズシモ其文藝德行ヲ修メ卓然ト衆民ノ上
ニ出テ之ヲ學校ニ養ハントスル者邦ニ數十人ニ過
ギズ其虚浮ナル者ハ之ヲ黜ク黜退ノ士ハ工タラン
ト欲スルモ巧ナク商タラント欲スルモ貨ナク勢ヒ
止ヲ得ザルヨリ多ク畎畝ニ歸ス是ノ如クシテ數十万ノ
士ヲ減ジ數十万ノ農ヲ益ス之ニ因テ推シテ以テ工
商ニ入ルセバ工ノ半ハ分レテ田ニ著キ商ノ半ハ割

テ農ニ歸ル而シテ天下數万ノ工商減ジテ數百萬
ノ農ヲ益ス茲ニ於テ國ハ益々富ミ民ハ益勤ム傍人
謗ジテ曰限リアルノ地ハ加益セズシテ驟ニ數十万
ノ農ヲ益サバ安ゾ此ノ閒田ヲ得テ以テ之ニ給セン
ヤ曰否ラズ面北ノ地木利ノナキヲ苦ミ曠野數百里
ノ間絶テ人烟ナシ東南ノ地素ヨリ膏腴ト稱シテ山
澤ノ土猶未ダ墾カザルモノアリ而シテ富民ノ園圃
多クハ沃壤ヲ占メテ又却テ無益ニ耗費スル尤モ多
シ誠ニ能ク大ニ水利ヲ興サシメテ無益ノ樹藝ヲ禁
ゼバ天下ノ地自カラ天下ノ民ヲ容ルニ足ル何ゾ耕

スベキノ田ナキヲ憂フルアラン若シ然ラバ花美日
ニ減ジ曠野日ニ墾ク民俗朴ナレバ訴訟止息シ田野
開ケレバ物産繁殖スベシ而シテ冗食ノ士從僕ノ徒
減去セバ從テ虛文飾ラズ遊民放蕩ノ者日ニ減ジ月
ニ消スルヲ期ス三民多クシテ農少ナケレバ堯舜出
ルモ亦治ムベカラズ三民ヲ減ズル法ヲ建ル治民ノ
專任ナリ官憲篤ク注目アラズンバ非ズト云爾

○一千八百七十三年二月十七日橫濱新聞紙ニ曰ク
陶器ニ画像或ハ風景ノ繪ヲ燒付ルハ古クヨリ為
ス術ニテ能ク知ラル、處ナリ然ルテ今法國ニテ巧

ナル方法ヲ以テ千二百度ノ極烈ノ熱度ヲ用ユ寫真
繪ヲ陶器ニ寫スノ術ヲ得タリ把里斯ノ寫真師シエ
ームナル者先頃此ノ手業ヲ盡シツヒニ此細工ノ功
ヲ奏シタリ此ノ新術ハ寫真繪ヲ以テ為スモノナレ
バソノ繪ノ線ト蔭ト美麗ニシテ在來ノ陶器ノ繪ヨ
リハ遙カニ擾レリ

○上海ニ於テ頃日烟草ノ人命ニ害アル證據ヲ顯ハ
セリ或人數俵ノ葉烟草ヲ以テ庭外ノ小屋ニ貯ヘ置
シニ茲ニ養ナフトコロノ驢馬終ニ之ヲ見出し充分
ニ之ヲ食セシガ忽チ其毒ニ當ツテ死シタリ驢馬素

ヨリ烟草ヲ以テ食トスルモノニ非レ凡一日之レヲ
嘗メテ其味ヲ知ル凡ハ其之レヲ好ムト他ノ食物ヨ
リ甚ダレ烟草ヲ好ムノ人再三此文ヲ看讀シテ反求
セサル可ケンヤ

○一千八百七十三年二月二十日橫濱新聞紙ニ曰ク
方今ハ牛或ハ水牛等ノ生皮ヲ以テ細ヲ製造スルモ
ノ多シ此ノ細ハ倉庫中或ハ坑内等ニテ滑車ヲ以テ
物ヲ引揚ルニ用ヒ又船内ニテハ船ノ細或ハ他ノ細
トナシ用ユルナリ之ヲ造ルハ毛ヲ剃リタル皮ヲ以
テ圓形ヲテールフルニ載セ始メ先ヅ庖丁ヲ以テ皮ノ

手足等ヲ截斷シテ漸々ニ之レヲ圓形ト為ス而シテ
後テールフルノ圓形ニ倣フテ細ヲ純ルニ適宜ナル幅
ニ截テ終ニ皮ノ盡ルニ至テ止ム之ヲ以テ細ヲ純リ
成テ後チ柔カニ丈夫ニ為スタメ或ル溶水ニ浸スナ
リ此ノ細ハ麻製ノ細ヨリ丈夫ナルト十倍ナリ
○東京新聞ニ云昨年郵便遞送ノ便ヲ開カレシヨリ
國內信報ノ自由ナル實ニ人民一般ノ幸福ナリ昨年
八九月頃ハ東京ヨリ内地諸州へ往復ノ書翰一个月
ノ總計七八萬ニ下ラズ爾來國內其便利ナルトヲ通
知スルヤ本年一月中ノ總計ヲ筭スルニ十五万六千

八百二十封ノ數ニ至レリ貨幣其他緊要ノ物品封入ノ通送保儉ノ方法ヲ設ケ傳送ノ時限今一層迅速ニ至ラバ倒底人民之ニ依頼シテ尚其數倍増加スルニ至ラン

○日新真事誌ニ云筑摩縣ニ於テハ松本城郭ヲ破却セントテ殿廈樓櫓ヲ入札セシムルニ當城ニハ天守ト稱スル樓櫓アリ數層高聳雲ヲ凌ギ天ヲ衝ケリ其壯觀ナル土人皆之ヲ誇稱ス落札代價三百三十余圓ナリ同所第八區副戸長市川量造ナル者往時ノ勝區名跡ヲ破壊スルヲ悲ミ且博覽會ハ人智開達ノ得

益アレバ縣下ノ古器旧物ヲ右樓上ニ網羅シ諸人ヲシテ縱觀セシメバ固ヨリ地位高蔽遠望快濶ニシテ頗ル人意ヲ養攝スル屈竟ノ場所ニ付落札金ヲ納メ地租ヲ收入スル故今年ヨリ十ヶ年破却ノ命ヲ弛ヘ借用イタシ度旨ヲ出願セリト云フ嗚呼量造ノ如キハ廢物ヲシテ有用物トシ迂物ヲシテ有益タラシムルノ良策近時ノ美談ト云フベシ

○岡山縣士族荻野長久郎野崎武吉郎岩崎益治ノ三名去ル慶應四年戊辰ノ春旧領主池田家奉朝命備中松山播州姫路其外出兵引續京攝守衛並東國出兵

ノ砌藩廳ニ於テ御用途差支ノ節右一二名祖先ヨリ
蓄藏ノ餘金國家有事ノ時ハ御用途ニ相備度志願ノ
折柄ニテ示談一決ノ上分限ニ應ジ合金八万兩藩廳
へ差出其節素志ノ趣建言ニハ相成レモ辛未ノ年ニ
至リ五十箇年賦返濟ノ旨申渡サレ其後縣制追々御
改革藩債御調べ等モ在セラレ此上自然 朝廷ヨリ
御下金等モ有之ニ於テハ祖先ノ志願ニモ悖リ且三
名ノ者等モ深ク恐レ入ルノ旨ヲ以テ殘金合七万八
千四百圓悉皆御消却被仰付候ハゞ御報國ノ微志貫
徹仕難有次第ノ段連署出願ニ及ビケレバ縣廳ヨリ

大藏省へ具狀シ且奇特ノ事ニ付至當ノ御賞賜有之
度申立ラレタリ

○近時横濱ガゼツト新聞ニ玻璃ヲ截断スルノ仕法
ヲ記載セリ其法ハ則チ樟腦ヲテレビニ油ニ溶解シ
テ之レヲ其截断セントスルトコロノ小刀或ハ錐等
ニ塗粘スル法ナリ此油ヲ以テギヤマンヲ截ル片ハ
其ノ堅軟厚薄ヲ論ゼズ甚ダ容易ニシテ毫モ破碎ス
ルヲナシ亦ギヤマンニ穴ヲ穿チ或ハ扁平ナルギヤ
マンヲ種々ノ形ニ截ラント欲セバ此ノ油中ニ小刀
ヲ浸入シ而ノ後截断スベシ斯ノ如クスルトキハ如

何ナルカタチニ形状カタチニ截断スルモ更ニ難キヲナシレカクニナス加之ギヤマ

シニテ製シタル器物其縁ヘリ粗造ナルトキハ此油ニテ

潤シタル金具ヲ以テコサ摩擦スレバ其ノ縁忽チコツタ滑澤ト

ナルニ至ルベシ是故ニ破碎シ易キギヤマント雖モ

此ノ油ヲ使用シテ截ルヤアタカ恰カモ赤銅ヲ取り扱フ如

ク頗ル簡便ニシテ破截ノ患ウレヒヲ免カル、ト必然ナリ

ト云フ

○第一号二葉表九行目ノ平阻ハ平阻ノ誤ナリ

○第二号初葉裏六行目ノ近衛局へノ四字ハ衍字也

○同号二葉裏九行目滋賀縣書ハ令松ノ道之ノ五字也

○誤落ス○同号五葉裏二行目ノ倭冠ハ倭冠ノ誤也

琵琶湖新聞第四號終